九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「英雄の旅」としての仏伝 Lalitavistara の理解

岡野, 潔
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

https://hdl.handle.net/2324/1787732

出版情報：印度学仏教学研究. 65 (1), pp.214-222, 2016-12-20. 日本印度学仏教学会
バージョン：
権利関係：

「英雄の旅」としての仏伝 Lalitavistara の理解

岡野　潔

2世紀後半頃に成立した，どの部派にも属さない独立した仏伝経典である『ラリタヴィスタラ』Lalitavistara（略号：Lal）は，部派教団の周辺にいた職業説法師によって「語り物」として伝えられた仏伝が，本来の「語り物」としての性質を濃厚に残したままで，大乗経典として出現した作品であると私は考える．その作品はインドの多くの仏伝文献（それらは部派内で編集された「語り物でない」律蔵特有の記録的な散文中心の文体をもつ）と明確に区別する必要がある．こうしてLalの素性を「語り物」とみなした上で，民話の構造をもつ1作品としてプロップの説話学の理論から説明すると，後に示す表Aのように，Lalは一つの話型をベースに譚の中核が形成された作品としてきれいに説明ができる．また表Bで示すように，Lalにおいては，釈尊の生が英雄神話の定型に沿って理解され，英雄神話の構造が譚のプロットの根本に決定的に入り込んでいると説明できる．

まずLalという作品の内容梗概を示しておきたい．現在の梵本Lalには原形と付加部分を区別できるが[1)]，以下は原形を十分に考慮した梗概である．

主人公は，三十三天において神々が奏する音曲の中に出現した鼓舞勧発の声により使命を自覚し，欲界の王マーラ（魔）の支配下にあって苦しむ有情を苦から解放するため，神々の希望通りに天から下生し，王子として生まれた．成長した彼はしばらくその目的を見失っているが，神々から出家を勧告され，また神々が演出する四門出遊の出来事を経験して，彼の生の本来の目的を自覚し，家を出て旅立った．彼は神々から袈裟衣を与えられ，出家者になって，二人の師に会い，6年の苦行の試練を経た後に，とうとう菩提樹下で固い決意をもって禅定に入り，超自然界の中で，魔軍をもって攻撃する敵マーラに打ち勝ち，勝利品として悟りを獲得し，定から出た．しかし法という不死の甘露を闘いの勝利品として世の人々にもたらす前に，マーラに勝利した直後に，彼は下生した本来の目的を見失ったかのように説法逡巡の状態に一時は陥った．しかし彼は神々の嘆きと梵天の強い勧請によってその危機を脱し，法を説くために人々が待つ世間に帰還する．彼の世間への帰還に際し，軽蔑的な態度をとる五比丘は彼が真に悟りを獲得した者であることを疑うが，その疑いを晴らして最初の説法に成功し，彼が悟りを得た者であるこ

とを証明し，人々に認められ，仏教僧団をつくり，真理の法王の座につき，説法の甘露により，地上の無数の人々を苦から解放した.

現在の梵文 Lal の付加部分には，部派教団の僧侶の手による編集作業で付加されたと思われる阿含の断片記事が多数見られるが，しかし Lal の原形テクストは，教団の周辺にいる職業説法師の手によって，世俗の「英雄譚の語りの鋳型」に基づいて作られたと私は推測する. その鋳型の英雄譚とは次のような，説話学の「魔法昔話」の話型に沿った基本構造をもつものとして理解すべきである：

主人公が，超自然的な敵のために苦難に陥った国や家族のために，派遣者の要請を受けて異界に出発する. 彼は旅の途中で贈与者から呪具を授けられ，あるいは不思議な援助者を得て，異界に入り，ついにその異界の王ともいうべき大敵を打ち破り，勝利品を得た者として，帰還の途に就く. その途中において追跡を受けて，一時危険に陥る. 自分が勝利者であることを騙る別の偽の主人公の出現などの最後の試練を乗り越え，彼は自らが真の勝利者であることを証明し，王となって，国の人々を幸せにする.

Lal は，「三十三天で神々の勧めを受けて有情の救済のために下界に出発した主人公が，王子として生まれてその目的を見失いそうになるが，神々の援助を受けてその目的を再自覚し，出家してついに魔を倒し，あまたの有情を救済する」というかたちで，民衆の英雄願望の投影として釈尊の生が解釈され，仏伝の語りが劇的な神話的英雄の譚になる様に変貌している作品であると見なしうる.

ロシアの民話学者プロップは『昔話の形態学』(初版 1929 年) で「魔法昔話」のジャンルの民話の構造分析を行い，現代のナラトロジー (物語論) の理論的基礎を築いたことは周知のとおりである. さて私が作成した表 A は，Lal の大まかな筋 (1～24) と，プロップの「機能」(A～W) を並べ，両者の対応を示すものである. プロップが見出した機能は 31 あるが，そのうち A から W までの 24 の機能が話の主要なシーケンスを作る. 表 A を見ると，仏伝が語る 1～24 の出来事と，プロップの A～W の機能が，継起順序が同じで，よく対応することがわかる.

〈表 A〉

仏伝『ラリタヴィスタラ』のプロット	プロップの「機能」A～W
1　有情の不幸. 輪廻界で無数の有情が堕落し，欲界の王マーラ（魔）に支配され，真理を知らずに苦しんでいる.	A　敵が家族の成員に害を加える. もしくは家族に何かが欠如する（加害行為もしくは欠如）.
2　勧告. 兜率天で神々と共にいた主人公は，有情の救済を勧告する言葉を聞いて，自分の使命を自覚する.	B　被害が主人公に知らされ，依頼があり，主人公は出立を促される（救助の依頼または派遣）.
3　下生の決意. 主人公は，マーラの支配から有情	C　主人公は敵の加害行為を回復

を解放し，幸せに導くため，下生を決意する.	することを引き受け，出発を決意する（**反撃の承諾**）.
4　**下生**．主人公が兜率天から出発し，下生する.	↑　主人公が家を出発する（**出発**）.
1　**誕生・成長**．主人公は王子として地上に誕生し，成長する.	A　敵が，家族の成員に害を加える．もしくは家族に何かが欠如する（**加害行為もしくは欠如**）.
2　**迷いの青春**．悩みつつ王宮に暮らし，生の目的を見失いかけている主人公に対し，神々は働きかける.	B　被害が主人公に知らされ，依頼があり，主人公は出立を促される（**救助の依頼または派遣**）.
3　**出家への躊躇**．4　**出家への決意**．神々は主人公の出家を促すため四門出遊などの出来事を起こす．神々からの勧告と働きかけに応え，躊躇する主人公はついに出家を決意する.	C　主人公は敵の加害行為を回復することを引き受け，出発を決意する（**反撃の承諾**）.
5　**出家**．神々が様々に手助けをして，主人公は城を出，在家生活を捨てる.	↑　主人公が家を出発する（**出発**）.
6　**二人の教師**．出家後，アーラーダ師とルドラカ師に瞑想を習う. 7　**六年苦行の試練**．五人の苦行仲間との出会い．主人公は死ぬ危険を顧みず，未曾有の苦行をなす.	D　主人公は，魔法の手段を手に入れるため，準備の試練を受ける（**贈与者の最初の機能**）. E　主人公が，贈与者になるはずの者の働きかけに反応する（**主人公の反応**）.
8　**力の獲得**．六年の苦行を終えた後，新たな境地が開け，娘スジャータの捧げた食を得て，魔の軍と戦える状態となる.	F　魔法の手段が主人公の手に入る（**呪具の譲渡**）.
9　**移動**．主人公はマーラ（魔）の軍と戦うことになる菩提道場に到着する.	G　主人公は，目指す目的の近くに到着する（**もう一つの王国への移動**）.
10　**マーラとの戦い**．菩提樹下で主人公は金剛定に入り，魔の軍との最終的な戦いに入る.	H　主人公と敵対者とが直接に闘う（**闘争**）.
11　**仏位の達成**．主人公は仏陀の徴と名をもつ者となる.	J　主人公に標がつけられる（**烙印**）.
12　**勝利**．主人公は勝利し，マーラが敗れる.	I　敵は敗れる（**勝利**）.
13　**悩苦の源の消滅**．魔の軍は消え失せ，平和を得る.	K　加害行為は回復される（**回復**）.
14　**世への帰還**．菩提樹下の主人公は悟りを獲得して，出定し，日常の世界に帰還する.	↓　主人公が帰路につく（**帰還**）.
15　**逡巡の危機**．主人公は獲得物たる真理を世にもたらしても徒労ではないかと逡巡し，説法を断念する方に心が傾く.	Pr　主人公は追跡され，あるいは誘惑され，帰路を妨げられる（**追跡**）.
16　**梵天の勧請による危機の脱出**．逡巡し，世への説法を断念しかかった主人公を梵天が説得して，彼は説法を決意する.	Rs　主人公は援助者の助けにより追跡から救われる（**脱出**）.
17　**初転法輪の地への到着**．主人公は説法のため鹿野苑にやって来るが，五人は彼が悟りを得た仏であることに気づかない.	O　主人公はこっそりもう一つの国または自分の家に到着する（**気付かれずに到着**）.

18　**五比丘の抵抗と疑惑の提示**．自らの苦行に優越感をもつ五人は主人公に対して，軽蔑的な扱いを試みる．五人は彼が悟ったはずがないと主張する．	L　にせの主人公が手柄を立てたのは自分であると主張する（**うその主張**）． M　主人公に難題が課される（**難題**）．
19　**疑念の解消**．主人公は彼を認めようとしない五人を説得し，説法により疑念を解消させる．	N　主人公が難題を解決する（**難題の解決**）．
20　**仏陀たることの認知**．初めての説法により，五人や無数の神々や人々の法眼が浄められ，主人公が悟った者であることが認知される．	Q　主人公が認知される（**認知**）． Ex　にせの主人公の正体が発覚する（**発覚**）．
21　**救済者への変貌**．主人公は教えを聞いた人々や無数の神々にとって無比の救済者となる．	T　主人公に新たな姿形があたえられる（**変身**）．
22　**邪見の消滅**．転法輪に接して無数の有情の邪見が消滅する．	U　にせの主人公または加害者が罰せられる（**処罰**）．
23　**牟尼の王**．主人公は無数の有情を悪趣から解放し，幸せにし，人天の師となる．	W　主人公は結婚するか，王位につく（**結婚**）．

この表Ａについて説明する．プロップの**派遣**（B）にあたるのが Lal 第２章の勧告品である．主人公が勧告の言葉を聞いて，自分の使命を認識することが，英雄譚の発端に必要であるが，Lal では天界で音曲の声が発する勧告から主人公が動き始めるのである．Lal では神々が実によく登場するが，彼らは主人公に対して派遣者・贈与者・援助者の役割を果たしていると理解される．初期聖典の仏伝断片を受け継ぎつつ，一つの「魔法昔話」の型で仏伝を作ろうとすると，贈与者や援助者として，神々の介入が必要になった．また成道（悟り）というものを主人公とマーラとの戦いに置き換えて，敵対者マーラの役割を強調する必要があった．Lal という作品の降魔品までの話の流れは，プロップの**加害／欠如**（A）から**回復**（K）までにあたるが，更に，プロップの**帰還**（↓）以降にあたるのは，Lal では悟りを獲得して後の一連の出来事である．つまりこの作品は，英雄譚として下生の目的の達成を語る物語であるから，降魔・成道で話を終えずに，さらにプロップの**帰還**（↓）から**結婚**（王位に就く W）までにあたる仏伝の出来事が語られる．それらは第 25 章勧請品から第 26 章転法輪品までにあたる．仏伝を「語り物」とするとき，初転法輪で話を終えるのが，もっとも聴衆に完結感を感じさせる終わり方であるため，Lal は初転法輪で話を終えるのである[2)]．このように Lal の仏伝の主要部分が，第２章の三十三天での勧告（つまり旅立ちへの召命）から始まり，第 26 章の初転法輪で終わって，全体的にプロップの「機能」のシーケンスと見事に合致することは，Lal の英雄譚としての「民話」の構造に基づくものである．

民話学者アールネとトンプソンは世界の民話伝承の話型をまとめた話型目録を

出版したが，特にその話型目録の中でも重要な位置を占める話型である「竜退治」(ATU 300) は，プロップの A から W までの主要な機能の流れを説明するための，最も分かりやすい具体例としても役立つが，Lal というテクストはこの「竜退治」という代表的な魔法昔話の話型に合うものである．この「竜退治」は昔話といえ，もともと神話的な内容の英雄譚であることに注意しなければならない．魔法昔話においては，主人公は最後に幸福を勝ちとるために，試練を乗り越えねばならない．この試練を英雄たるべき者の通過儀礼と考えると，魔法昔話は英雄神話と同じ基本構造をもつことになる．魔法昔話と英雄神話とは，密接に関連し合う隣接的領域であり，次に英雄神話の構造という観点から Lal を考察する．

キャンベルの『千の顔をもつ英雄』（略号：『千の顔』）によれば，古今の英雄神話は基本的に同一の構造をもつ．彼は『千の顔』で，世界の英雄神話に共通する，英雄の神話的冒険の普遍的なパターンを「モノミス monomyth（神話の原形，単一神話，原質神話）」と呼んだ．その図式は同時に「英雄の旅」the Hero's Journey とも名づけられた．モノミスという表現は少し大げさかもしれないが，キャンベルが理念型として，世界の英雄神話の土台的構造を明解なものにした功績は大きい．その理念型について，『千の顔』で彼は次のように述べる：「**英雄の神話的冒険がたどる標準的な道は，通過儀礼が示す定形――分離，イシニエーション，帰還――を拡大したものであり，モノミスの核を成す単位と言ってもいいだろう．**」

「**英雄はごく日常の世界から，自然を超越した不思議の領域 (X) へ冒険に出る．そこでは途方もない力に出会い，決定的な勝利を手にする (Y)．そして仲間 (Z) に恵みをもたらす力を手に，この不可思議な冒険から戻ってくる．**」（上，54 頁）――この「出離，試練と勝利，帰還」の X-Y-Z の 3 ステップ，3 幕が，英雄の「行きて帰りし物語」，英雄神話の土台を作る．キャンベルは英雄神話の構造たる「英雄の旅」を次のような図式に示す．

英雄の神話的冒険のパターン――キャンベルの「英雄の旅」

I　〈**出離**（離別・出立）〉

　①冒険への召命　②召命拒否　③自然を超越した力の助け

　④第一関門突破　⑤鯨の腹の中

II　〈**イニシエーション**（通過儀礼としての試練と勝利）〉

　⑥試練の道　⑦女神との遭遇　⑧誘惑する女

　⑨父親との一体化　⑩神格化　⑪究極の恵み

III　〈**帰還**（帰還・帰還した主人公の社会への再統合）〉

⑫帰還の拒絶　　⑬呪的逃走　　⑭外からの救出
⑮帰還の境界越え　⑯二つの世界の導師　⑰生きる自由

キャンベルの「英雄の旅」が驚くべき応用可能性・普遍性をもっていることがよく証明されたのは，それを実際に映画のシナリオ作りの理論にしてみせたヴォグラー Christopher Vogler の著書『神話の法則』The Writer's Journey 1998 を介してである．その彼の著書では，キャンベルの「英雄の旅」が少し修正され，次のような3幕，12ステージの図式にされる．

ヴォグラーの「英雄の旅」

第1幕　〈出離〉　①日常世界　②冒険への召命　③召命拒否　④賢者との出会い　⑤第一関門突破

第2幕　〈イニシエーション〉　⑥試練，仲間，敵対者　⑦最も危険な場所への接近　⑧最大の試練　⑨報酬

第3幕　〈帰還〉　⑩帰路　⑪復活　⑫宝を持って帰還

ヴォグラーの著作を介して，「キャンベルの12ステージ」とも呼ばれる「英雄の旅」は作劇術以外に心理治療など，様々な分野の多くの現場においても利用され，神話学を越えた広範な領域で，理論の有用性が証明されるに至る．

昔話研究の成果としてのプロップのA～Wの「機能」と，英雄神話研究の成果としてのキャンベルの「英雄の旅」という英雄譚の型と，シナリオ生成のマニュアルとしてのヴォグラーの図式の，三者を比較してみると，基本構造に類似性がみられるため，一つの表にまとめることが可能であり，それら三者は Lal の仏伝プロットによく合うことが確認できる．その四者の対照を表Bに示す．

〈表B〉　※「英雄の旅」は前世の出来事を含まないので，この表は誕生から始める．

仏伝『ラリタヴィスタラ』	キャンベル『千の顔』	ヴォグラーの「英雄の旅」	プロップの「機能」
1　誕生・成長	①冒険への召命	①日常の世界（主人公が日常の世界で紹介される）	A　加害行為もしくは欠如）
2　迷いの青春	①冒険への召命	②冒険への召命（冒険への召命を受ける）	B　救助の依頼または派遣）
3　出家への躊躇	②召命拒否	③召命拒否（主人公は冒険に気乗りがしない）	
4　出家への決意	③自然を超越した力の助け	④賢者との出会い（賢者によって励まされる）	C　反撃の承諾
5　出家	④第一関門突破	⑤第一関門突破（関門を突破して，特別な世界に足を踏み入れる）	↑　出発

6　二人の教師 7　六年苦行の試練	⑤鯨の腹の中 ⑥試練の道	⑥試練・仲間・敵対者（試練，仲間，敵対者に遭遇したりする）	D　贈与者の最初の機能 E　主人公の反応
8　力の獲得	⑥試練の道		F　呪具の譲渡
9　移動	⑥試練の道	⑦最も危険な場所への接近（最も危険な場所に接近して，第二の試練を自ら受ける）	G　もう一つの王国への移動
10　マーラとの戦い	⑥試練の道 ⑦女神との遭遇 ⑧誘惑する女	⑧最大の試練（そこには最大の試練が待ち構えている）	H　闘争
11　仏位の達成	⑨父親との一体化 ⑩神格化	⑨報酬（主人公は報酬を得る）	J　烙印
12　勝利 13　悩苦の源の消滅	⑪究極の恵み	⑨報酬	I　勝利 K　回復
14　世への帰還		⑩帰路（日常の世界への帰路を探し求める）	↓　帰還
15　逡巡の危機	⑫帰還の拒絶 ⑬呪的逃走	⑩帰路	Pr　追跡
16　梵天の勧請による危機の脱出	⑭外からの救出	⑪復活（第三の関門を通り抜け，復活を経験し，変貌を遂げている）	Rs　脱出
17　初転法輪の地への到着	⑮帰還の境界越え	⑪復活	O　気付かれずに到着
18　五比丘の抵抗と疑惑の提示	⑮帰還の境界越え	⑪復活	L　うその主張 M　難題
19　疑念の解消 20　仏陀たることの認知	⑮帰還の境界越え	⑪復活	N　難題の解決 Q　認知 Ex　発覚
21　救済者への変貌	⑯二つの世界の導師	⑪復活	T　変身
22　邪見の消滅 23　牟尼の王	⑰生きる自由	⑫宝を持って帰還（宝を持っての帰還を果たし，日常の世界に恵みと宝を持ち帰る）	U　処罰 W　結婚

この表Bから，仏伝 Lal は菩薩を主人公とする神話的英雄譚である，ということが確認できよう．英雄神話とは，単に大敵を倒すだけで成り立つのではない．説話学上，それは次の ABC 三つのポイントを押さえていなければならない：

(A) 主人公は自分の個人的な欲望よりも，依頼もしくは運命により「使命」を与えられた者として旅に出発する． (B) その旅は「往」と「還」から成る．

(C) 旅と切り離して，大敵を倒す行為があるのではない．主人公は旅のなかで課題を克服し，難題を乗り越える．

キャンベルによれば英雄神話とは「行きて帰りし物語」であり，つまり「往」と「還」からなる．もし仏伝の語りが成道までで終わるなら，「往」のままで終わってしまう．成道後にさらに転法輪の行為へと続いてゆくシーケンスこそ，英雄の「還」にあたるのである．仏伝では英雄譚の定石どおりに，「還」の最終段階において，主人公は人々の英雄からさらに人々の師へと変貌する．人々から受ける尊敬が彼が得た報酬である．また英雄譚は利他のため，勇気をもって闘いの生を選ぶ者の物語であり，そこで主人公には次の様に 3 度彼の人生の試練の中で勇気を示すことが求められる．つまり (1)「往」における出発の勇気，(2) 敵対者との戦闘に入る勇気，(3)「還」における人々が待つ地点への帰還の勇気である．Lal はこれらの A～C，1～3 の条件を満たしている英雄譚であると確認される．

以上，Lal は英雄譚として，神話の「型」や物語の文法によく合った形で基本構造が作られていることを確認した．Lal という作品はプロップの A から W までの全部の機能をそなえもつ，「魔法昔話」の「竜退治」のような代表的話型と完全に重なる話型であると同時に，またキャンベルが指摘する英雄神話の鋳型に従い，「英雄の旅」の普遍的黄金律に従って作られた作品として見ることが出来る．

最後に追加的な考察を述べる．私は「語り物」としての，Lal のような英雄譚の話型から作られた仏伝は，Lal（の原形）以外にも，古代には複数存在したと考える．それらを仮に「Lal 型仏伝」と呼びたい．Lal 型仏伝は本来，部派教団の周辺にいる職業説法師の語りから発生したので，教団の組織内で編集された文献のように，一つしか存在しなかったと考えるのは不自然である．説法師の集団ごとに口承のみで存在する，未だ大乗経典ではない様な Lal 型仏伝の語りが沢山あって，その世俗の民話的な話型をもつ仏伝伝承の中から，大乗経典化され書承となった Lal という 1 作品が出て来たと考えるべきであろう．Lal 型仏伝は，部派教団がもつ受戒犍度の仏伝記事の延長線上にあるような「編集された教団仏伝」とは素性を異にする．それは主人公を最高の英雄に仕立てて，大勢の聴衆の感動・熱狂をめざす語り手たちの話芸の伝統の中で自然に生まれてきたもので，「英雄の旅」という「英雄神話」としての鋳型から譚のコアが民間で形成され，或る時期にその 1 伝承が大乗化されたと考えられる．

聖者たちを英雄として崇める民衆の自然な心性により，ほとんどの聖人説話（聖者譚）の内容は，真理をめぐるヒーローの試練と克己の物語であり，試練に打ち

勝って高い次元の者となって絶望的な状況から蘇った者，凡夫には手が届かない真理を戦利品として，人々の住む日常の世界にもたらした者の物語である．

代表的な捨身ジャータカの多くも，基本的に同じ聖人譚の構造をもつ．捨身ジャータカと Lal 型仏伝は，同じ 3 幕構成の「英雄的な聖者（聖なるヒーロー）の物語」の語りの構造を根底に有している．その構成は次の様なものである．

1. 主人公は日常の世界から真理の世界に近づく．
2. 真理の世界で，真理をめぐる大きな試練を受け，それを乗り越える．
3. 真理の世界から日常世界に戻り，戦利品として真理を日常にもたらし，以前より高い次元の存在（聖者）として人々に真理の偉大さを伝える．

このような聖者譚として仏伝や仏教説話は，困難な生における英雄的で利他的な生き方を示す，自己啓発的な物語として，民衆の無数の人生を励ましてきた．

1）Lal の原形と付加の区別については岡野潔「普曜経の研究」上（『論集』14 (1987): 93–108 頁）と中（『論集』15 (1988): 91–104 頁）の論文を参照．

2）プロップによれば，登場人物の「行動領域」（行動のカテゴリー）は七つあるが，それらを Lal と対応させると，次の様になろう：**敵対者**（マーラ），**贈与者**（神々），**援助者**（神々），**派遣者**（三十三天での勧発の声，神々），**王女**（明・悟り），**主人公**（菩薩），**偽主人公**（五比丘）．——問題は「王女」の行動領域である．釈尊という英雄が悟りを得るという行為は，神話のレベルでは敵対者であるマーラと対決して勝利すること，そして明・悟りという王女を獲得することを意味する．菩薩の探索の対象として，その王女にあたるのが女性名詞の明（vidyā）や「悟り」(bodhi）であるが，当然ながらそれは抽象語として明確な人格化が避けられる．しかし「王女」の人格化としての女性原理が，大乗において般若（prajñā）や般若波羅蜜や明の名で顕在化することは歴史的に避けられないものであったし，密教の時代になると，仏伝の成道記事の中に隠されていた女性原理の擬人化が明確化して，『秘密集会タントラ』の冒頭のように釈尊と女性原理との交合が，一種の譬喩的ヴィジョンとして説かれることになる．

〈参考文献〉

ジョーゼフ・キャンベル 2015『千の顔をもつ英雄』(新訳版)，上下，ハヤカワ・ノンフィクション文庫．

クリストファー・ボグラー 2002『神話の法則——ライターズ・ジャーニー』ストーリーアーツ＆サイエンス研究所．

〈キーワード〉 Vladimir Propp，Joseph Campbell，Christopher Vogler，英雄神話，説話学

（九州大学教授，PhD）